

■ 平成 24 年度研修会を開催しました

2月24日(日)に平成24年度の研修会を行いました。例年、この時期には研究発表会を行ってききましたが、平成24年度の研究会発表会は、7月1日に、平吹利数氏から白鷹町石像文化財悉皆調査の成果を発表してもらい、開催しました。そのため、次年度の総会まで、ずいぶん間が開くことになりましたので、当初の予定になかったのですが開くことにしました。



研修会は「白鷹町史(現代編)について」というテーマで、町史編さん室の渋谷敏己副室長(当時)から、編さんの意義や史料の保存について伺いました。また、執筆者の一人である会員の守谷英一から、執筆の状況や難しさについて報告しました。公文書館のようなものの必要性も説かれ、有意義な研修会でした。

■ 一枚の絵画から —船橋惣三郎のこと1—

長井線の旧鮎貝駅を利用していた人の中には、駅の待合室に「深山観音堂」という絵が掲げてあったことを記憶している人も多だろう。し

かし最近になって、その絵は誰が描いたものだったのか、どこにいつてしまったのかと、気にかけている年配者が多くいることに気がついた。出稼ぎ、集団就職、旅行など、何かにつけ旧鮎貝駅を利用していた人たちにとっては思い出深い、目になじんだ絵だったのである。

その絵が行方不明になったのは二十年前の国体という事業に合わせて、駅舎の全面改築と駅前公民館建設が重なった時である。事業は町主導で進められたが、こうした時はたいてい物事を考えたり、振り返ったりする余裕はない。時間がたって気がついた時はすでに遅く、当時を記憶している人もいなくなっているのである。

さて、その絵である。描いた人は船橋惣三郎(M27・8・荒砥生れ)で、後に再び白鷹に移り住んだ人である。一時期、荒砥に住んだあと、鮎貝駅前に家を建てたというのだが、その後、山形に居を移したせい、今では地元の人も忘れつつある人である。惣三郎は一時期、美術の講師として荒砥高校に出ていたというので調べてもらったら、惣三郎と娘婿の順一の名前が高校の旧職員名簿に載っていた。順一の方は生物や農業科目、車の運転を教えていたという。しかし、その二人も家族もすでに亡くなり、船橋家は絶えてしまったが墓は荒砥の金鐘寺にあることがわかった。

肝心な「深山観音堂」の絵である。探索の結果、町の副町長室にあった。おかげ(?)でそう大きな傷みはないようだったが、なぜこの場所にあるのかがなんとも不可解で、係りの人には、いきさつはともかくも時期をみて地元に戻した方がいいのではないかという話をした。このほかに彼が描き残した絵はないのだろうかという人が集まった席で話を出したところ、西高玉の瑞龍院に龍門の滝と寺の門を描いた大きな絵があるということがわかった。さらに内町の樋口家や大町の鈴木家には白鷹山らしい絵があるだけでなく、鮎貝地区公民館にはひとまわり小さな深山観音堂の絵が飾られていることもわかつ

たのだった。船橋惣三郎という人は、美術館の調べによると、いわゆる県美展には昭和二十一年の第一回から出品し続け、後には無鑑査の上の「委嘱」に推挙されているという。山形や白鷹でも個展を開き、パリに遊んだこともあると聞いた。

それだけではない。この惣三郎という人は戦前に東京の方で大勢の人を使っていた事業家で、火災報知器や車の方向指示器（かつては菱形のものが上下していた）を考え、特許を取得していたというのである。また、かつては商業デザインのような仕事にも手を出していたらしく、「ブルドックソースのブルドックの絵を描いた」という話を、本人から聞いたという人も現れた。最近は大手の会社が古いものを後世に伝えるべく収集・保存に力を入れていると聞くので、いずれ確かめてみたいと思っているが、そのほかにもまだ不明なことがいくつもある。年月がたつとどこでも昔のことを知っている人がいなくなり、過去のことを気に止める人がいなくなる。公民館や学校でも職員が変わり、いつ、どういう経過で絵や書の寄贈を受けたのかわからないというのは日常茶飯事らしい。行政の末端のあれこれを口説いてもはじまらないが、せめて寄贈を受けたものは台帳を作り、事のいわれを後の人に伝えることはそこにいる人の務めでもあろう。今のこの有様はただ嘆かわしいというしかない。（丸川） 2013・3

■ 仏像展「湯殿山信仰、異形の神仏」に補足して

新海竹太郎の制作への関与と出来町八日講の御沢仏図掛軸

宮本晶朗

○はじめに

3月から4月にかけて、白鷹町文化交流センターにて白鷹町の仏像展②『湯殿山信仰、異形

の神仏：塩田行屋の「御沢仏」』を開催した。調査した中でいくつか注目すべき事柄があったため、まだこれから調査すべきこともあるものの、まずは現状で判明しているところを記したい。なお、御沢仏の信仰面に関しては会報25号で報告したので、そちらをご覧ください。

○御沢仏と新海竹太郎

本展に出展した塩田行屋の御沢仏は20数体で一具の群像であるが、その内の「御蔵大黒弁財天」の台座に「明治十二巳卯五月吉日／山形県下十日町／新海宗慶正作（花押）／作謹」という墨書がみつき、御沢仏の制作者と制作年が明らかになった。制作者である新海宗慶（宗松、1846～1899）は山形市十日町で仏師・仏壇業を営んでいた人物で、近代彫刻の大家である新海竹太郎（1868～1927）の父としてよく知られている。

御沢仏はこの墨書銘と、宗慶の制作で間違いない塩田行屋の木造如意輪観音菩薩坐像と同様の作風であることから宗慶作であることは疑いない（図1、2）。



図1 新海宗慶作 如意輪観音菩薩坐像



図2 新海宗慶作 御沢仏：八万燈明仏

しかしその一方で、群像の中には頭部の奥行や耳の形状といった特徴が明確に異なり、他の仏師によって制作されたと思われる像が見受けられる。具体的には、御沢八万八千仏の十三仏の2体である（図3、4）。

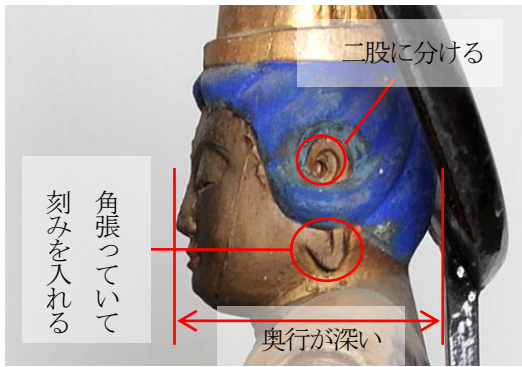


図3 御沢仏：御沢八万八千仏



図4 御沢仏：十三仏

20数体にも及ぶ群像であるから、宗慶1人のみで制作するのではなく、他の仏師を使いながら制作に当たったことは想像に難くない。それでは他の仏師とは誰であったのか。宗慶の制作環境は大規模な工房によるものではなく家内制の制作で、家長である宗慶を中心に、妻サダが彩色を、息子竹太郎が制作全般を手伝っていたと考えられる。竹太郎の少期の活動については、竹太郎の銘が宗慶作の木造如意輪観音菩薩坐像の台座中から新たに発見された（平成23年の調査時）ことにより、少なくとも明治10年には家業の仏師業の手伝いをしていたことが判明している。そうしたことから、明治12年の御沢仏の制作に参加した宗慶以外の仏師とは、長男であり唯一の男子であった竹太郎に他ならないだろう。

ここで、竹太郎の少年期の制作で間違いない、大江町左沢の松田家に伝わる像と比較してみたい（図5）。これは竹太郎が13～14歳頃に大江町左沢の林治郎兵衛の下で仏師修行した際に、付近の松田家に下宿しそのお礼として作られた像である。この像と前述の御沢仏の中の御沢八万八千仏と十三仏を比較してもやはり造形的特徴が一致していることから、これらは数え12歳の竹太郎によって制作されたものと思われる。のちに彫刻家として大成する竹太郎が少年期に制作した、極めて貴重な作品といえるだろう。

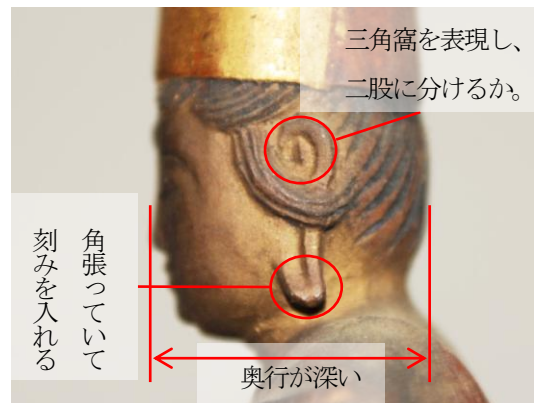


図5 新海宗慶作 御沢仏 八万燈明仏

○御沢仏図掛軸

湯殿山の祭礼は8月8日に行われ、それに合わせて講（同じ信仰を持つ人々による集まり）を開いたことから、湯殿山講は八日講といわれる。白鷹町内にも以前はいくつかの八日講があったようであるが、現在は出来町八日講のみとなっている。

本展で出展した御沢仏図掛軸は、その出来町八日講で用いられている掛軸で、明治37年に鳳如という画家によって制作されたものである（図6、7）。出来町八日講では講の際に湯殿山と書かれた掛軸とともに本作を掛け、湯殿山御拜経を拝み上げしている。この際に御沢仏のそれぞれの尊名が唱えられる。たとえば「御注連八大金剛童子 一時礼拝、御裏三宝代荒神 一時礼拝…」というように尊名の後に一時礼拝と付けて唱える。本作の画面には22体の神仏が描かれており、それらは塩田行屋の御沢仏と形

状が一致するものがあることから、御沢仏を描いたものとみて間違いなかろう。出来町八日講では講に不可欠な掛軸と認識していたが、これが御沢仏であり、まさに拝み上げているそれぞれの神仏が描かれたものとは認識されていなかった。



図6 出来町八日講 御沢仏図掛軸



図7 御沢仏図掛軸 部分

絵画化された御沢仏は、筆者は本作の他には未見であるが、海向寺（酒田市）には注連寺の御沢仏を曼荼羅状に表した版木が遺されているという。版木があるということは、各地の八日講で使用できるように相当数の御沢仏の版画が刷られていても不思議はない。また同様の使用目的で、本作のように版画ではない絵画も相当数制作された可能性はあろう。そのため県内に留まらず、八日講が現在も続いている地域や以前はあった地域では、こうした御沢仏の絵画は現在も遺されているのではないか。ただし、講や修験者の活動の衰退や御沢仏の存在の特殊性

などから、現在では正体不明の神仏が描かれた絵画として、存在が認識されていない状況は十分に考えられる。

○まとめ

塩田行屋の御沢仏は、まず湯殿山信仰において重要な存在であることは会報 25 号に記したとおりであり、加えて近代彫刻家・新海竹太郎が制作に参加した像としても大変貴重な存在といえる。

出来町八日講の御沢仏図掛軸は、八日講（湯殿山講）において御沢仏が重要な役割を持っていたことを示す作品といえる。同時に、こういった絵画化された御沢仏は江戸時代から明治時代に掛けて多く制作され各地の講などで使用されたものの、現在はほとんど忘れ去られた存在になっていることを示唆している。

■ おしらせ

はじめに悲しいお知らせです。

会員の清野功一さんが3月にお亡くなりになりました。御冥福をお祈りします。

また、今年度より、次の方々が新たに会員になります。

宮城 宏さん（鮎貝）

関 千鶴子さん（鮎貝）

嶋林淳子さん（荒砥）

心より歓迎します。

深山和紙の漉き手である今利一郎さんが2月23日に亡くなったことを聞きました。遅くなりましたが、先日、御自宅に伺い、お悔やみを申し上げ、お線香を上げてきました。

深山の生活の中の紙漉が絶えてしまいました。本当に残念なことです。生活の中の手仕事について、少し追いかけてようと思っています。

守谷